

# いのち 生命のにぎわいとつながり

No.25

平成23年11月

## 房総半島の外来生物

産業活動など人間の活動によって、もともといなかった地域に入ってきた生物を外来生物といいます。千葉県でも、1000種を超える外来生物が確認されています。このうち、県内の生態系や、農林水産業などへの影響が懸念される外来生物は50種類以上あり、一部の種については防除事業が実施されています。今回は、県内にいる外来生物のうち、特に、哺乳類に焦点を当て、入ってきた経緯や問題点について紹介します。また、里山と里海の生態系評価では、シリーズ2回目として生態系サービスについて解説します。

## 千葉県の外来生物のケモノはどこにいる？

浅田 正彦 千葉県生物多様性センター

### 外来生物の影響

近年、世界の生物多様性に大きな影響を与える要因として、外来生物が問題になっています。千葉県でも多くの外来生物によって人間生活や在来生態系が脅威にさらされています。今回は、特に外来生物のケモノ(哺乳類)の現状について、簡単に紹介します。

### 外来ネズミ

小さなものから紹介すると、ネズミの仲間では、家ねずみ(ドブネズミ、ハツカネズミ、クマネズミ)とマスカラットがいます。家ねずみは、由来がはっきりせず、史料に古くから登場し、遠い昔、人とともに渡ってきたようです(ドブネズミについては、在来種との説もあります)。マスカラットは戦時中に軍服にする毛皮生産のために輸入され、東京都江戸川区で飼育されていた記録があります。毛皮は手触りがミンクに似ており、業界では人気の素材のようです。現在は、水元公園(東京都葛飾区)や行徳野鳥観察舎(市川市)付近で確認されており、最近茨城県でも発見されているという未確認情報もあります。

### ピーターラビットがやってきた

ウサギでは、千葉県には、昔からノウサギが生息していますが、アナウサギを家畜化したカイウサギという外来の種類が、鋸南町の浮島で1980年代に放され、野生化しています。アナウサギは、ノウサギとは異なるヨーロッパに生息する種で、ピーターラビットなどの題材にもなっていますが、畑を荒らす害獣としても有名です。



(写真1) シカの仲間のキョン(特定外来生物)

## CONTENTS

	頁
1 千葉県の外来生物のケモノはどこにいる？.....	1
2 里山里海の生態系評価2 -生物多様性を豊かにする“からくり”と生態系サービス.....	3
3 生命のにぎわい調査団 団員募集.....	4

### 動物園からの逃亡

シカの仲間のキョン(写真1)は、動物園の園内で放し飼いにされていましたが、廃園となってからは園外へ逃亡して増え、現在は、県南部の広い範囲で生息が確認されています。草食性のシカの仲間で、田畑の作物を荒らします。

同じように動物園から逃亡したと見られているのが、房総半島南端の白浜地区に生息するアカゲザルです。アカゲザルは、日本に生息しているニホンザルと交雑してしまいます。この交雑個体が増えると、ニホンザルの遺伝的固有性が失われるので、見かけ上はサルの個体数が多くても、房総半島のニホンザルの絶滅が進行してしまうというやっかいな問題が発生しています。

### 出会うはずのなかった2種

ハクビシン(写真2)は東南アジアに生息するジャコウネコ科の中型獣で、顔の真ん中に縦に通る白線や長い尻尾が特徴的です。国内の分布に連続性がないことや、江戸・明治期における確実な生息記録がないことから外来生物とみられています。ネズミ科のマスカラットと同様に、戦時中の軍服用の毛皮獣として輸入され、野生化したようです。1980年代に茨城県から千葉県に分布が拡大し、現在は、船橋の駅前や千葉市の埋立地周辺などでも目撃されるなど、県内に広く分布しています。

アライグマ(写真3)は北米原産の中型獣で、ご存知のように「あらいぐまラスカル」の放映とともに輸入数と飼育数が激増し、その後、野外に放棄され野生化してきました。県内では、1990年代から生息記録があり、現在は、県内に広く分布しています。このハクビシンとアライグマは、もともと、生態がよく似ており、木のぼりが上手で樹上に巣を構えるため、家屋の屋根裏に侵入して住みつくことがあります。

原産地が遠く離れており、人間が移動させなければ、決して会うことがなかった2種が、どちらも県内の屋根裏で暮らし、ともに県内の在来生態系へ大きな影響を与えています。

### 絶滅後に侵入したイノシシ

イノシシ(写真4)は、昔から、千葉県内全域に生息しており、江戸時代においても農作物への被害が甚大で、村々では被害軽減のために幕府より鉄砲を借り受けて対策をしていたようです。イノシシは1頭でもいれば農作物被害を出し、崖や林道を掘り崩してしまうので、生息を認識しやすい種です。野外での寿命は10年未満で、県内では1970～80年代にかけ、13年間も

捕獲記録や目撃記録がないことから、絶滅したものと考えられています。その後、県外から持ち込まれたイノシシが放獣され、その増加率が高いために、現在では房総半島南部のほぼ全域に生息するまでになりました。さらに、ここ数年の間に、北総でも生息域を拡大しており、近い将来、県内全域に分布を広げていく危険性があります。

このように県内で見られる外来生物は、意図的に野外に放されたものが起源となっている場合があります。現在、外来生物法による特定外来生物に指定されているアライグマなどは放獣が禁止されていますが、イノシシやハクビシンは対象外となっています。外来生物問題を拡大させないために、飼育個体を野外に放すことを絶対に無くしていかなければなりません。



(写真2) ハクビシン



(写真3) アライグマ (特定外来生物)



(写真4) イノシシ



**里山里海の生態系評価2：**  
**生物多様性を豊かにする "からくり" と生態系サービス**  
 中村俊彦 千葉県生物多様性センター・県立中央博物館

**1. 人の暮らしが育む生物多様性**

房総半島は、暖流の黒潮と寒流の親潮の影響により南北の動植物が出合う、世界で最も生物多様性豊かな場所のひとつです。一般に「人間活動は、自然を汚し壊すものであり、自然を守るためには人の影響を排除しなければならない」と言われてきました。

しかし、自然と一体となった人の暮らしが創り出した房総半島の里山里海、そこには、生物多様性をさらに豊かにする“からくり”（①～④）がありました。

**① 多様かつ連続的な水環境の創出**

奥山の水源から海まで、人々の利水や治水による多様な水環境のネットワーク、とりわけ稲作による水田や水路、ため池等の新たな水環境の創出は、動植物の生息・生育環境を増大させました(図1)。



図1 多様な水環境を創出した水田

**② 多様な遷移段階のモザイク構造**

人が自然を手入れすることによって、森や林、草原など多様な遷移段階の環境が常にモザイクとして保たれ、それはまた多様な動植物の生息・生育環境の保持につながりました(図2)。



図2 森林利用がもたらすモザイク構造

**③ 作物や家畜の移入と新たな品種づくり**

人々は、より豊かな暮らしのために作物や家畜など、外部からさまざまな動植物を集め、さらに土地に適し、地域に根ざしたいろいろな品種をつくり出しました(図3)。



図3 人がつくる作物や庭木

**④ 節度ある利用と自然を守る文化**

自然のリズムのなかでの人の生活・生業は、自然を畏れ敬う畏敬の念とともに、節度ある資源利用によって、自然を守り、その恵みを長く得るための文化を育んできました(図4)。



図4 自然を敬う豊作祈願の祭り

図1～図4  
浅井 桑男 画

**2. 生物多様性がもたらす生態系サービス**

生物・生命は、その土地環境と相まって、競争や共生、また食物連鎖の関係等で互いにかかわり、その全体は生態系をつくり出します。この生物多様性と生態系がもたらす人々への恵みを「生態系サービス」と呼んでいます(図5)。

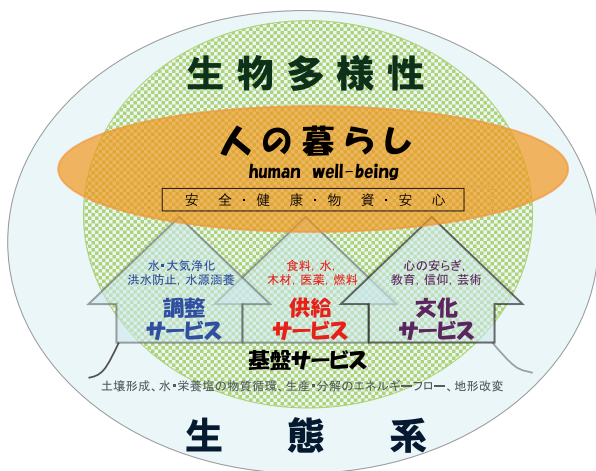


図5 生物多様性と生態系サービスに支えられた人の暮らし

私たちに最も身近な食料や水、木材や繊維、薬や燃料等の生態系からの資源を「供給サービス」と呼び、また、生態系の水や大気の浄化作用、洪水や土壌浸食の防止、そして森林の水源涵養や植物の温暖化防止など環境条件の安定性を保つ機能を「調整サービス」と呼びます。さらに、生態系は、信仰や芸術、美意識を育み、伝統技術や教育、観光やレクリエーションによる心の安らぎなど人々の精神を育む「文化サービス」をもたらします。

水や栄養塩の物質循環、また生産や分解のエネルギーフロー、そして地形変化や土壌形成等、生態系の基本的機能については「基盤サービス」とよんでいます。

このような生態系を形づくる素が生物多様性です。生物多様性が豊かであればあるほど安定し持続力ある生態系となり、私たちへの供給、調整、文化の各サービスもより豊かなものになるのです。

今回は、人間社会の変貌と生態系サービスについて解説します。

いのち  
生命のにぎわい調査 対象生物(例)

★発見報告生物(見つけたら報告)

- 千葉県にもともといた生きもの  
イタチ、キジ、カワセミ、ミヤコドリ、オオバン、アマサギ  
ニホンアカガエル、ハマビルガオ、ヤマユリ、メダカ・・・

- 千葉県に入ってきた生きもの  
アライグマ、イノシシ、ナガサキアゲハ、クマゼミ・・・

◆季節報告生物(その年、最初に気付いた時に報告)

- (初鳴き) ウグイス、ミンミンゼミ、ヒグラシ・・・
- (開花) ウメ、ソメイヨシノ、ヒガンバナ、ビワ・・・
- (紅・黄葉) カエデ、イチヨウ

いのち  
生命のにぎわい調査団 団員募集

千葉県内の生物多様性を知るために、身近な生きものの調査報告を行う団員を募集しています。

地域にいる身近な生きものの報告を、県内の生息分布図等にまとめています。調査対象は、発見報告と季節報告で全57種です。

また、団員向けに、生きものの見分け方の研修として、年2回観察会を開催し、団通信を年5回発行しています。(団員数：平成23年11月現在697名)

対象：小学生以上

(自然観察、生物調査に関心のある方)

応募方法：県生物多様性センター・にぎわい調査団のホームページから「入団申込書」をダウンロードし、必要事項を記入して郵送

(ファックス送付可 FAX:043-265-3615)

<http://www.bdcchiba.jp/monitor/nigiwai.html>

受付期間：随時

問い合わせ・入団申込書の送付先

下記の千葉県生物多様性センターまで

Email : [monitor@bdcchiba.jp](mailto:monitor@bdcchiba.jp)

生命のにぎわい通信 第19号



生物多様性ちばニュースレター No.25 平成23年11月30日発行

編集・発行 千葉県環境生活部自然保護課 生物多様性戦略推進室 生物多様性センター

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2 (千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <http://www.bdcchiba.jp/index.html>